

高冷地における良食味米生産のための 追肥の判断技術

福島県農業試験場 冷害試験地

平成14年度福島県農業試験場試験成績概要

1 部門名

水稻－水稻－施肥法

分類コード 01－01－13000000

2 担当者

新妻和敏・矢島 豊

3 要旨

- (1) 幼穂形成期の2kg/10a窒素追肥(以下窒素追肥とする。)により、8、9月の気温にかかわらず玄米収量は増加した。
- (2) 8、9月の月平均気温が平年を下回る年次には、窒素追肥により玄米タンパク質含有率が高くなった。しかし、平年以上の年次には、追肥によって玄米タンパク質含有率が高まるとは限らなかった。
- (3) 8、9月の月平均気温が平年以上の年次でも、基肥が8kg/10aの場合や生育途中に遮光処理を行った場合には、窒素追肥により、玄米タンパク質含有率が高くなった。
- (4) 玄米タンパク質含有率と玄米生産効率との間には負の相関関係が見られた。しかし、8、9月の月平均気温が平年より低い年次には、玄米生産効率が高くても玄米タンパク質含有量は高めとなった。
- (5) 8、9月の月平均気温が平年より高い年次は、窒素追肥による玄米生産効率の低下が見られなかった。
- (6) 以上から、高冷地では、生育診断に基づく適正追肥であれば、8、9月の平均気温が平年より高い場合、玄米タンパク質含有率を高めることなしに収量を確保することができる。一方、この時期の気温が平年より低い場合には、追肥により玄米タンパク質含有率が高まるため、低温が予想される場合には、追肥を控える。

4 その他の資料等

なし